



たからっ子

(10・11・12月行事報告)

2025

[第122号]

令和7年12月26日発行

発行責任者 藤川顕彰

運動会を終えて



10月5日に運動会を開催しました。今年は開園60周年を迎える節目の年もあり、フィナーレでは以上児クラスが昭和・平成・令和の楽曲に合わせて踊り、最後には全員でバルーンリリースを行いました。子どもたちの心にも、思い出として残ったことだと思います。年中児はパラバルーンの演技に取り組みました。みんなでたくさん練習を重ね、本番では見事に成功させることができました。力を合わせて頑張ることや、あきらめずに取り組むことの大切さを、子どもたちは運動会を通して学びました。

いよいよ保育も後半に差し掛かります。年長児は就学に向けた準備が本格的に始まり、それぞれのクラスでも進級を見据えた取り組みが進んでいきます。日々の生活や遊びの中での一つ一つの経験を大切にしながら、子どもたちが自信をもって次のステップへ進めるよう、丁寧に積み重ねていきたいと思います。



秋の遠足



年少組は動植物園へ行きました。園内では約束を守りながら見学し、本物のライオンやホッキョクグマの大きさに驚く姿が見られました。心待ちにしていたお弁当の時間には、「先生見て！」と嬉しそうな声があふれていました。改装工事を前に、キリンやゾウにも会うことができ、心に残る一日となりました。

いちご組は子ども達にとって初めてのお弁当でした。おうちの方にお弁当作りで工夫したことを聞いてみたところ、おにぎりやおかずの大きさを一口大にしたり、子どもが好きなものを中心に入れたりと自分で食べやすいように考えて作っていただいたようです。おうちの方が工夫を凝らして作っていただきお弁当、子ども達はおいしくいただきました。



成道会のつどい

12月12日、成道会の集いを行いました。年長児は、お寺で「上を向いて歩こう」の合唱を披露しました。祖父母の皆さまも一緒に口ずさまれ、温かな時間となりました。園に戻ってからは和太鼓演奏を行い、今年度最後の演奏として、気持ちのこもった力強い姿が見られました。給食ではあたたかいだご汁を囲み、笑顔あふれるひとときを過ごしました。



まことの保育 日常に溶け込む仏教用語「双六」

昔、お正月の子どもの遊びといえば、凧揚げ、はねつき、かるたと並んで双六がありました。振り出しから上がりまで誰が早いかを争う楽しいゲームです。

双六は古くインドに誕生しました。『涅槃経』にある波羅塞戯がそれで、後に欧州でバックギャモン、中国や日本で双六と呼ばれるようになりました。

双六には、「古制双六」と、「絵双六」の二種類がありました。

古制双六は、『源氏物語』『枕草子』などの多くの文献に現れ、古くから盛んに行われていましたが、賭博性が強く何回も禁止されています。

絵双六は最初、「仏法双六」といい、修行僧に天台の名目を教えるための絵でしたが、それが転じて「浄土双六」になりました。振り出しから地獄六道のありさまが描かれているところを通り、極楽浄土に上がるものです。その後、東海道を旅する道中双六など現在のようないろいろな双六となりました。



1歳児もも組では、まもなく迎えるお正月に向けて、コマを作って遊びました。

コマは紙皿に子どもたちがマーカーで色を付けて作りました。始めはどうやって遊ぶのか分からぬ様子でしたが、保育者が回してみると、真似して自分でもやってみようと奮闘していました。クルクル回るコマを見て歓声をあげていた子ども達、一足早いお正月気分を味わうことが出来ました。



編集後記

今年も残すところ、あとわずかとなりました。今年の漢字は「熊」でしたね。全国各地で熊の出没が相次ぎ、自然との向き合い方や、命の大切さについて改めて考えさせられる一年でした。年が明けると、すぐに発表会を迎えます。日々の保育の中で積み重ねてきた経験を、子どもたち一人ひとりが発揮できる場になればと願っております。

寒さが厳しくなり、体調を崩しやすい時期です。感染症にも十分ご注意いただき、ご家族そろって、どうぞよいお年をお迎えください。